

2023

龍谷大学 学生気候会議 提言書

主催：第3回龍谷大学学生気候会議運営委員会
共催：龍谷大学地域公共人材・政策開発リサーチセンター（LORC）
龍谷大学学生気候会議実行委員会、OC's
後援：京都市、龍谷大学チャレンジ FOR SDG's

本提言書の構成

1. 本提言書の背景と目的	2
2 提言	
2.1 学生からの提言	
2.1.1 グループワークからの提言	
テーマ1「大学の脱炭素化へ向けた取り組み」	3
テーマ2「伏見工業高校跡地のライフ・デザイン」	5
2.1.2 意見集約からの提言	10
3 参加学生の状況と学びについて	12
4 主催者としての総括	13
5 資料編	
5.1 会議の内容	14
5.2 運営体制	18
5.3 ファシリテーション・グラフィック成果物	19
5.4 学生気候会議意見集約項目（全文）	20

1. 本提言書の背景と目的

コロナ禍の国際的な混乱が落ち着きを見せた現在、改めて気候変動対策と脱炭素化へのコミットメントが求められている。本学も、創立400周年に合わせて、2039年までのゼロカーボン・ユニバーシティの実現を宣言し、京都市の脱炭素先行地域の取り組みにおいても、伏見エリアの主要アクターの1つとして参画するなど、地域の脱炭素化に向けて積極的な取り組みを展開している。

龍谷大学地域公共人材・政策開発リサーチセンター（LORC）と学生団体OC's（オックス）は、2023年12月に第3回龍谷大学学生気候会議を開催した。取り組みの参考にした「気候市民会議（climate assemblies）」は、気候変動に対する政策・事業の開発や実施の意思決定プロセスに市民の意思を反映させるためのツールで、欧州諸国を中心に国自治体レベルで実施されてきたものである。2021年度の第1回では、「学生自身の気候変動問題への理解の深化や主体性の涵養」、2022年度の第2回では、より本来の意義である気候ガバナンスへの直接的関与を意識し、「ゼロカーボン・ユニバーシティの実現を宣言した大学の気候変動対策に学生目線での提言を行うこと」をそれぞれ主目的として設定した。第3回となる今回は、地域に根ざした教育機関としての龍谷大学が気候会議を実施する意義として、「地域の脱炭素化への具体的な貢献を行うこと」を認識し、過去2回の目的に加えてこれも新たに目的のひとつとして加えることとした。

本提言書は、この第3回の学生気候会議において参加学生が議論し、提言として導出した内容を中心に、運営側であるLORC研究員によって編集され、同じく運営者のOC'sの学生たちとの調整の上でまとめられたものである。提言のソースは気候会議における次の4つのアウトプットである。

- ①気候会議における参加学生のグループワーク（6グループ）による提言
- ②気候会議終了後の、参加学生個人への意見集約（気候変動対策に関する27の質問）の分析結果
- ③参加学生への気候会議前後のアンケートの分析結果
- ④気候会議で講師をお願いした2名の専門家と運営者であるLORC研究員からの提言

今回の気候会議では、議論のための基礎情報として、専門家による気候変動問題の講演に加えて、本学のカーボン・フットプリントの数値や各種の脱炭素化へ向けた取り組みの情報も、参加学生に提供していたが、2日間という時間制約のため、学生からの提言にはデータなどによる論理的な説明に乏しいもの含まれている。それでも、日々地域で生活し地域と共に学ぶ学生の目線からのこれらの提言は、これから地域全体の脱炭素化の旗振り役となるべき本学の今後のコミットメントを考える上で、重要な示唆を提供してくれている。

第3回龍谷大学学生気候会議運営委員会一同

2 提言

2.1 学生からの提言

2.1.1 グループワークからの提言

今年度の気候会議では、1日目に「大学の脱炭素化へ向けた取り組み」、2日目に「伏見工業高校跡地のライフ・デザイン」というテーマでグループワークを行なった。

グループワークのための基礎情報として、1日目は、京都市及び龍谷大学の取り組みの紹介と、専門家による5つのテーマ「エネルギー、建物、通勤・通学、食、教育」に関する講義を提供し、その後、90分の議論セッションを行った。青い付箋に「すでに出来ていること」、赤い付箋に「出来ていないこと、もっとやった方がよいこと」を記入し、テーマごとに整理する形をとった。

以下ではグループごとに作成された成果物に記載された内容を、5つのテーマごとに再構成したものである。提言の頻出度を、学生目線での重点度とみなすことができるため、重複する内容もあえてそのまま掲載している。

テーマ1「大学の脱炭素化へ向けた取り組み」

【エネルギー】

- ・再エネ100%の実現
- ・空き教室の電気節約
- ・龍谷ソーラーパークの増設
- ・地域に根ざした新電力との連携、環境省との連携
- ・印刷物の低減
- ・ゴミの分別の推進
- ・サプライチェーンの可視化（RE100の企業をできるだけ使う）
- ・龍谷ソーラーパークの周知（取り組みが学生に知られていない）
- ・再生可能エネルギーなどの新エネルギーの導入
- ・講義での紙配布の禁止（PDFデータ、QRコード、板書などの活用）
- ・使用済み用紙の回収
- ・擦り損じの紙の回収ボックスを全てのコピー機に設置、図書館のしおりや講義レジュメなどのデジタル化
- ・大学校舎にソーラーパネルを載せる
- ・2up2downを休み時間に放送

- ・教室に人感センサーを導入（小さい教室から）
- ・人数に合わせた教室の予約システムの構築
- ・学生のエレベーター利用の低減
- ・電気の自動消灯システムの導入
- ・冷暖房の温度管理の見直し
- ・ペットボトル販売の削減
- ・大学でのゴミ分別をもっと細かくする
- ・リサイクルされるゴミの見える化
- ・自販機自体の数の削減
- ・キャンパス内の空調の調整（レスポンスで空調のアンケート [出席確認と連動])
- ・使用していない教室・トイレの照明の消灯（学校へ自動化システム導入を呼びかけ、学生向けに放送での消灯呼びかけ）
- ・学生のゴミ分別強化
- ・大きすぎる包装の見直し
- ・リリパック専用のゴミ袋にリリパックを入れることで生協のアプリ内でポイントが貯まる仕組み
- ・トイレの電気消灯について放送での呼びかけ（手動の場所の把握）
- ・トイレの電気を消すボタンに音を出す・かわいいシールをつけるなど（思わず押してしまう工夫）

【建物】

- ・センサーによる電気のON/OFF
- ・室温の統一と学校側による管理（温度の設定±2℃まで自由に設定）
- ・放課後や生徒が少ない時間帯での建物の利用エネルギーを減らす→講義室に自動感知センサーを取り付け
- ・自然風を活用したエアコンの使用、窓の断熱

【通勤・通学】

- ・龍大バスのEV化
- ・キャンパス間バスの時刻表見直し
- ・スクールバスの燃料の改善
- ・大学間バスのEV化
- ・龍大バスのEV化

【食】

- ・ベジタリアンメニュー、地産地消のメニューの提供、家でも作れるメニューの配布
- ・学食にて京都の食材を使ったメニューの提案
- ・脱ミートメニューの提案（学生から募る→人気が出る）
- ・環境問題を考慮した食の機会提供
- ・ミートフリーの開催
- ・食堂や学食のロスを明らかにする
- ・廃棄物の処理方法の明示
- ・ゴミの分別をわかりやすくするためにゴミ箱を透明化
- ・コンポスト肥料への変換
- ・弁当箱にご飯を詰めてくれるサービス
- ・カトラリーの有料化
- ・食べ残しのテイクアウトをOKにする
- ・曜日ごとに注文を分析して食品ロスを抑える
- ・ミートフリーマンデーの実施
- ・生協のフードマイレージキャンペーンの継続
- ・生協での売れ残り商品の状況把握
- ・季節商品の作りすぎの防止
- ・食品CO2排出を減らす取り組み
- ・目安箱を置く
- ・全体として大学が行なっていることが学生に伝わっていないことが課題
- ・カーボンニュートラルの取り組み内容の周知
- ・気候変動について知ってもらうきっかけづくり
- ・環境教育の機会の提供
- ・全学生を巻き込み協力させる仕組みづくり
- ・学生気候会議に留学生を巻き込む

【教育】

- ・学生の環境意識の育成
- ・大学の取り組みを学生に知らせるしくみづくり（スマホアプリを使った広報、ポータルサイトの絶対回答させる機能の活用）
- ・学生がもっと声を上げることができる場所の設定
- ・学習内容を披露する機会の創出（ポスターセッション、ディスカッションの場の創出など）
- ・ゲーム形式の学びの提供
- ・大学広報が学生団体と協力
- ・教務課に脱炭素を学ぶカリキュラム導入を提言
- ・フードロスの現状を学食で掲示
- ・授業中やポータルサイトで取り組みを紹介
- ・環境学習の必修化
- ・キャンパス間の情報格差を減らすための共同講義の開講
- ・ポスターや動画の作成
- ・教授からの発信強化
- ・ゼミ交流の推進
- ・深草キャンパスでの大画面での宣伝
- ・演習のテーマに「環境」を入れる

テーマ2 「伏見工業高校跡地のライフ・デザイン」

2日目は、「伏見工業高校跡地の街区開発計画」という実際のプロジェクトの現状の説明と、専門家によるライフスタイルと行動変容に関する講義を提供した後、50分+80分の合計130分のグループワークを行った。実際の街区の写真を大きく引き伸ばした地図（右図）を準備し、あらかじめ提示した3つの論点をもとに出されたアイデアを直接プロットする形で議論した。

1グループあたり4、5名の参加学生とファシリテーター役のOC'sの学生1名、という構成で、6グループで議論を行った。ここでは、グループごとに提言内容をまとめて紹介する（基本的な議論テーマは設定したものの、議論の進め方は各グループに任せたため、議論項目はグループによって異なっている）。



図：日本経済新聞ウェブ版（2023年10月10日）
「京都・伏見に脱炭素の街 阪急阪神不動産など整備へ」
<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUF1032B0Q3A011C2000000/>
(2024年5月23日閲覧)より引用

グループワーク②の論点

下記3つのポイントについて、地域の大学生として、または街区に住む住民としてできることは何か？

- ①ハード+ハードだけでない脱炭素の仕組み・取り組みとは？
- ②脱炭素化に向けて街区の住民間のつながりをどう創り出すか？
- ③この街区とその周辺地域をどうつなげるか？

1班

テーマ	伏見工業跡地の住宅地勧誘
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・各施設が離れている ・期待する入居者が限定されている ・宣伝方法が定まっていない
目標	「なんでも屋」
対象	全世代の人（子供、学生、社会人、高齢者の方など）
施設の場所	<ul style="list-style-type: none"> ・川沿い（川周辺に主要な施設がないため） ・公民館や、カフェなどの様々な施設が内接された建物
イベント	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども食堂、勉強を教える場所、高齢者向け交流スペース ・地産地消のものが買えるスーパー、地産地消のものを利用したカフェ ・スマホ教室 ・保護者向けの講習会
その他のアイデア	<ul style="list-style-type: none"> ・見回り活動 ・公園での遊び道具の貸し出し ・公園の草刈り（草刈りをしてくれた方は表彰される） ・託児所の設置

2班

テーマ	住民にとって魅力的なまちづくり
課題と対策	課題1：新たな環境に対する不安 カarbonニュートラルへのネガティブな印象 →試しに住んでみる（1～6週間）ゲストハウスの施設 課題2：商業施設を活かせていない →CO2排出量を表示し、他と差別化する
その他のアイデア	・住む場所が多く営業面で厳しい。住宅を減らし、リサイクル施設、農園、保育施設、小学校、公園などのコミュニティスペースを設置 ・元々のプランにあるコミュニティスペースは街区住民同士が軽いコミュニケーションをとるカフェにする。 ・元々のプランにある公園は、周辺地域住民、学生のためのスペースとして分割し、公園ではイベントスペース、ストリートバスケ・フットサル場にする

3班

テーマ	伏見工業跡地の住宅地勧誘「伏見オゾタウン」
課題	・戸建てとマンションで生活の分離 ・脱炭素への関心が低いとほかの住宅地と差別化できない ・脱炭素化への活動をネガティブにとらえられる ・どのような街かわからない
目標	脱炭素と地域活性化
勧誘のための取り組み	①学生に対して ・社会課題に関心のある学生を勧誘し、寮生中心の学生団体を立ち上げる →イベント企画/SNS発信/ボランティア活動 ・各学生に支援金・補助金の援助（町のチューターの役割の担う） ②住民に対して ・ポイント利用→アプリ内で「ウォークポイント」の実施（5000歩で1ポイント付与） ・特典ポイント*条件満たせばポイント付与 →ごみの重さ、電気代を各世帯で毎月集計を行い、基準を満たせばポイント付与 ・ポイントは割引、利用、投資に利用できる。 ・イベント開催 参加でポイント付与、企画側はポイント付与率UP、清掃大会、仮装イベントなどの町を歩く祭り、文化祭with高校、大学
各コアでの活動アイデア	①グリーンコア：芋ほり体験、家庭ごみをコンポスト化、動物の共同飼育、学生が子どもに農業体験実施、泥団子づくり大会 ②クリエイティブコア：食堂スペース農園でつくった野菜をメニューに取り入れる、子ども食堂、芝生エリアでBBQ,ドッグラン ③コミュニティコア：日替わりイベントの実施（プラネタリウム/ヨガ/無料塾/料理教室/フリーマーケット/お泊り会） ④マンションエリア：1階にジム、シェアスペース、シアタールームを設置し、街区周辺の住民との交流を促進

4班

テーマ	「寄り道したくなるまち」
課題とその対策、アイデア	<p>●高齢者が疎外感を抱かないようにする：クリエイティブコアを中心に交流ができないか考えた。例えば、ゲームを通じての交流や、京文化と一緒に体験する。京文化については、高齢者の方に京文化の知識を若い世代に伝える機会にもできるだろう。また、階段や段差をスロープにする、手すりを付けるなどのバリアフリーを進める。高齢者の方だけでなく、ベビーカーを使う子育て世代にも過ごしやすいまちになる。</p> <p>●持続的な公園管理：公園でフリマイベントなどを開催する。主催をまちの人として、出店者は周辺地域からも募る。イベントで得た収益を公園の維持に充て、持続的な管理につなげる。</p> <p>・複雑なシステム：まちで生活するにあたっての注意点などを勉強会や説明会で伝達する。また、イベントの見学や参加、まちの人との座談会を説明会などに加えることで、その生活をイメージできるようにする。生活をイメージしてもらった上で、移住するか否かを定めることができるようにする。</p> <p>●脱炭素：</p> <p>・ゼロ・ウェイストセンターの設立：生活で出るゴミを45種類に分別する。その中で、まだ使うことができるものはフリマなどでリユース品として販売する。また、分別・リユースを推進する施設としてグリーンコアにリユース・リサイクルセンターを設立する。</p> <p>・シェアサイクリング：まちの中を移動する手段として自転車を推進する。シェアサイクリングを整備することで、気軽に移動できるようにする。また、周辺地域へも自転車で移動できるように、サイクリングステーションを駅など利用する範囲内に設置する。</p> <p>●アプリの活用法：アプリは、まちの情報を収集するために必要なモノになる。そのため、普段から見るようなシステムを構築する。例えば、キャラ育成のミニゲーム（たまごっちのような）の機能を加える。</p> <p>●ポイントの使い道：貯め方として、地域での活動を行うや、万歩計の機能を搭載し、歩けば貯まるようにする。万歩計機能の搭載は、コンセプトである「歩き回るまち」に近づく機能になるだろう。また、使い道に関しては、換金（施設利用料、買い物費）や幅広いモノに交換できるようにする。クラウドファンディングのように施設の改修費としてポイントを使うことができるようにする。</p>
目標	脱炭素と地域活性化
街区の構成アイデア	<p>3つのゾーンを設定し、住民が目的に応じてそれぞれのゾーンへ歩いていく、加えて周辺地域住民にも使えるようにする。これを通して、歩いて楽しいまちを目指す。そして、この町に住んでよかったと思えるまちにしたい。下記3ゾーンを1週間内に回るとポイントが付与され、フリマなどで使用できる仕組みを作る。</p> <p>○アクティブゾーン（クリエイティブコア） 運動や交流、能動的なつながりを意識した環境を整備する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フリマなど（周辺地域の住民も参加・出店可能）のイベントの開催 ・パフォーマンスの披露（周辺学校の発表）などができるステージ ・ボール遊びできる（子どもたちがのびのび遊べる）スペース ・ドッグラン

街区の構成アイデア	<p>○グリーンゾーン（グリーンコア）</p> <p>ゆとりのある時間を過ごすための、静かで自然豊かな環境を整備する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・花壇や畑などを活用し、お花畑といった緑のある環境を作る ・勉強できるスペース（周辺学校の生徒や学生が勉強できる）を設ける ・本棚（勉強のための参考書が中心）を設置する ・龍谷大学生などがボランティアとして、学習室を運営する ・コミュニティカフェ（ゆったりとした時間を過ごす）の運営 <p>○トークゾーン（コミュニティコア）</p> <p>住民同士の交流を活性化させる環境を整備する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コミュニティカフェ（ボードゲームなどで遊ぶ・会話を楽しむ）の運営 ・地域の本棚（不要な本と本棚にある本を交換できる）を設置 ・ストリートピアノの設置 ・無人交換所（不要な品を交換できる）の設置 ・発電自転車ジム（室内でも運動できる）の設置 ・足湯（住民の交流）の設置
-----------	--

5班

課題	<ul style="list-style-type: none"> ・住宅数の多さ ・所有車両の多さ、充電スポットの多さ ・学生が集える場所の提供の確保 ・菜園スペースの狭さ ・全体的な緑の少なさ
改善案	<ul style="list-style-type: none"> ・いくつか戸建て住宅を無くして共有スペースを作る <p>共有スペースの活用方法（主に居住者交流）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・レンタサイクル用の駐輪場をつくる ・コンポストを活用して菜園スペース ・マルシェ（毎月）を開催できる場所 ・毎朝のラジオ体操 ・フリーマーケット ・ステージをつくりイベントに活用 ・戸建て住宅の2軒分を1軒に統合してシェアハウスにし、学生を中心に集えるスペースをつくる <p>地域貢献施設の活用方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・防音室をつくる ・毎月祝日に則したイベント開催（例：敬礼の日…年配の方に感謝を伝えるイベント） <p>水と緑のプロムナードの活用方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・川沿いを主に高齢者向け住宅にして、散歩をしやすように ・ベンチを設けて、くつろげたり花見を楽しんだりできるようにする

改善案（続き）	<p>ファミリー分譲マンションの活用方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・棟数が多く、圧迫感があるため数を減らす →空いたスペースにニワトリなどの動物を飼ったり、自然と触れ合えるスペースを作ったりして交流できる場を提供 ※動物の飼料は、この地域で発電して余った電気を他地域と交換して費用削減 ・マンションの外壁やバルコニー周りにペロブスカイト太陽電池を設置 ・階段の段差を小さくして、高齢者も含め居住者が運動する機会をつくる <p>戸建て住宅の活用方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一家に一台車を所有する必要ない。 →各戸建て住宅にある充電スタンドを減らせる →車を所有する家庭を一区間に集めて、フットパスの範囲を広げる →車を無くすと戸建て住宅の駐車スペースが空くため、家庭菜園や庭として活用 →マンションの地下にカーシェア（EVをメイン）のための駐車場を設ける ・木材で和風モダンな家 <p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・蓄電量を増やして、戸建て住宅が昼と夜に必要な電気を売買せずに済むようにする ・緑を増やす ・開発公園に遊具を設けて、周りの地域の子どもたちとの交流を増やす
---------	--

6班

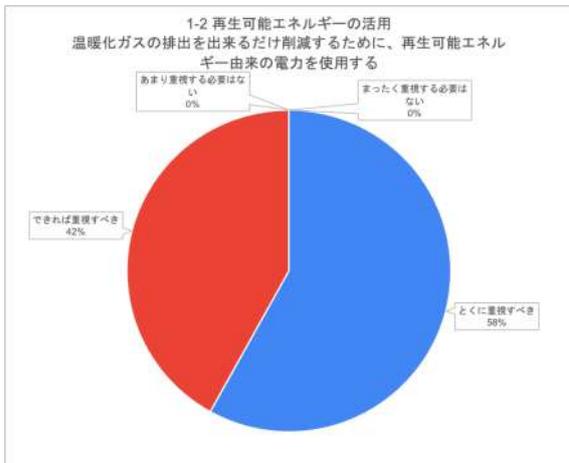
テーマ	人とのつながりから広がる脱炭素化
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者と若者のつながりができにくい ・コミュニティへ参加しにくい
アイデア	<p>◎高齢者と若者の「give and take」の関係を作る （若者からのgive）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・電球の付け替え ・買い出しの荷物持ち ・週一の訪問（→学生主催イベントの誘い） ・導入アプリの使い方を教える ・ゴミ回収のお手伝い <p>（若者へtake）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・おばあちゃん、おじいちゃんの手作りご飯 ・高齢者の知恵、一人暮らしなどに使える知識を得る → 孤独死回避、セカンドライフ、人と話す安心感を得られる <p>◎イベント運営、投票（FUSHI-COのやつ）することでお得なポイントゲット（→街のお店などで利用可）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ジムでのつながり（ジムの器具を使って発電しながら人と一緒にジム） ・スイカ割り ・餅つき大会 ・カラオケ大会（発電しながら、十分な発電ができていないと途中で曲が終わる） ・映画鑑賞会（発電しながら、カラオケと同じ） ・服の寄付、0円で販売イベント

2.1.2 意見集約からの提言

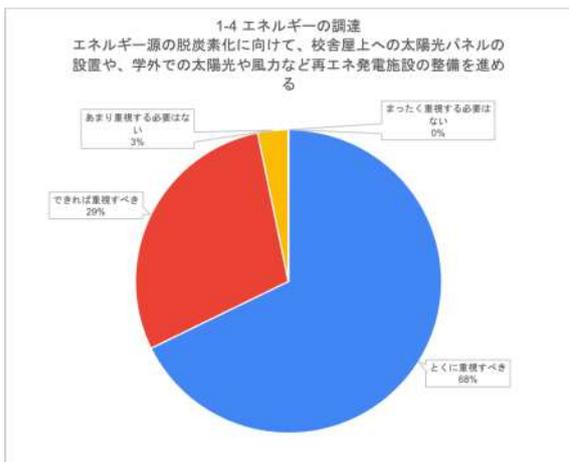
2日目の気候会議の最後に、参加学生には18の項目について、どの程度重視するかを尋ねた。また自由記述で、2つの事柄についての問いかけを行った。回答者数31名である。

一般的には、気候会議に参加した学生たちは、今回の気候会議の経験を大変貴重であったと感じており、今後とも同じような機会を通じて、異なった学びに従事している他学部の学生や大学院生との時間をかけた意見交換の機会を持つことを待ち望んでいることが判明した。

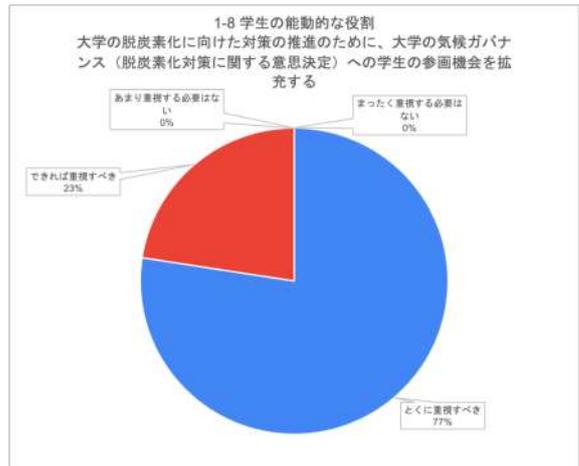
いくつかの項目についての回答結果を見ていく。再生可能エネルギーの活用については、グラフのように、過半数の学生たちが特に重視すると肯定的に回答し、否定的意見はなかった。



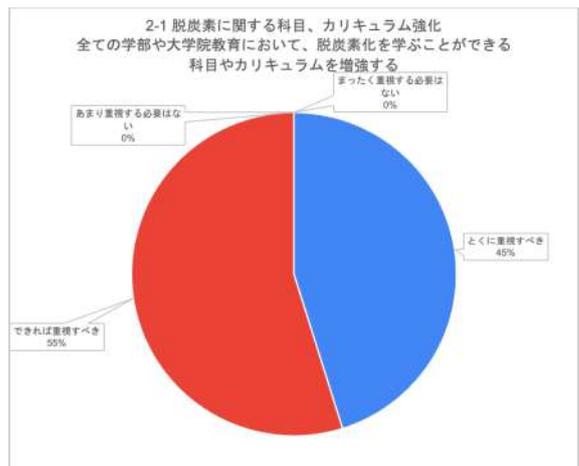
エネルギーの調達については、1名の学生を除いて、大学内外での再生可能エネルギーの調達に積極的になるべきであると回答した。



大学の気候ガバナンスへの参加については、学生たちは全員、これまで以上のより積極的な参加を希望していることが回答結果から読み取れる。



学生たちの積極性は、カリキュラムの強化についての項目からも明らかである。グラフのように、全ての学生が、大学における全ての教育カリキュラムにおいて、脱炭素について学べるようにすべきであると回答している。このことは自由記述からも読み取れる。文学部からの参加学生は、「文学部の人間として、そういった環境問題の授業を文学部の専攻科目としてないことが何よりも気になる」と記した。



自由記述として、「脱炭素社会への挑戦において、あなたはどのような人材になりたいですか」という項目に対しては、さまざまな回答があった。それらを総合すると、以下のようにまとめられよう。

幅広い視野と豊かな感性をもち、脱炭素化というテーマについて興味関心をもち、積極的に考えつつも、無理なく家族や友人といった周りの人々を巻き込みつつ、そのような人々と楽しみながら行動していける人になりたい。

さらに、「龍谷大学や伏見・深草地区のカーボン・ニュートラルへの挑戦について、あなたが思うことを自由に記載して下さい」という問いかけを行った。

伏見工業高校の跡地のプロジェクトについての提言（pp.5-9）にあるとおりであるが、この自由記述の回答からも、学生たちの共通の思いが伝わってきた。つまり、龍谷大学での取り組みを、他大学との連携によって、京都市や京都府といったより広域のレベルにまで引きあげ、そのような連携の諸活動に学生たちも積極的に関与していきたいと考えている。とりわけ、今回のような再開発プロジェクトでは建築学などの知識も必要になるが、その分野は龍谷大学ではカリキュラムとして提供されていないため、他大学との協働はとりわけ大切である、という思いである。

3 参加学生の状況と学びについて

申込者は29名（運営スタッフである学生団体OC's 6名は含まず）で、ポータル・チラシ等がきっかけとなった人が4名、無作為抽出メールがきっかけとなった学生が5名であった。友人・知人よりが3名、教員からの紹介が7名であった。参加者の人数と所属学部は以下のとおりである。

参加学生数：

参加学生数：31人（1日目）、
30人（2日目）、
うち全日程参加学生29人
（Oc's 4、斎藤ゼミ6、的場ゼミ4）

全日程参加学生の所属学部（人数）：

文学部（2）、法学部（1）、社会学部（2）、経済学部（2）、経営学部（2）、国際学部（10）、政策学部（9）、理工学部（0）、農学部（1）

全日程参加学生の学年（人数）：

4回生（2）、3回生（16）、2回生（4）、
1回生（7）

会議前のアンケートより（回答者30名）、気候変動に関して詳しい学生ばかりでないことがわかる。（詳しい2名<7%>まあまあ知っている11名<36%>、あまり知らない14名<47%>、ほとんど知らない3名<10%>）**ほとんど全学部、全学年から参加し、気候変動に関する知識もさまざま、参加理由も多様**であった。参加理由には、昨年度参加した人から話を聞いた、昨年度参加して再度参加した、といったように回を重ねる意義も見えてきた。気候会議は多様な意見を集約することが主目的であり、この目的にかなった参加者構成であると言える。

会議後のアンケートでは（回答者30名）、『2日間の感想』『特に印象に残った学び』『次年度もしたいか』『会議主催者へのメッセージ』について自由記述とした。

2日間の感想については、「楽しかった」「有意義」「勉強になった」と**全員が肯定的な感想**を持っていた。また、学年や学部を越えたひとたちとの「話し合い」「議論」「ディスカッション」

「グループワーク」により**多様な意見を知ることができたという感想が12名**から寄せられた。

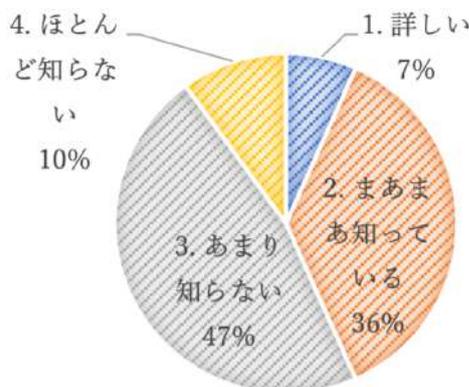
「堅苦しいと思っていたがざっくばらんに話し合えて楽しかった」という意見もあった。加えて、「自分でも何かできる」「脱炭素の実現は自分に関わる身近な問題である」といった環境問題を「自分事」としてとらえる意見も9名が記載していた。

次年度も学生気候会議が開催されたら、「ぜひ参加したい」（16名）「参加してもよい」（14名）と**全員から参加するという回答**を得た。

特に印象に残った学びについては、「カードゲーム」（6名）「龍谷大学の脱炭素への取り組み」（5名）「対話や話し合いの重要性」（5名）「伏見地区の脱炭素のまちづくり」（3名）

「エコな暮らしに対する楽しさや前向きな取り組み方」（2名）、「脱炭素」（3名）と、会議デザインで学びのターゲットとしたキーワードがすべて言及されており、学びの場としても気候会議が非常に有効であったことがわかる。

会議主催者へのメッセージ欄には、参加者全員からねぎらいの言葉とていねいなお礼の言葉が綴られており、「学生、企業、行政、教授の方々とみんなで会議に積極的に参加できる雰囲気がとてもすてきだと思いました」といった学生と教員、地域とのパートナーシップの重要性にも気づかされた。企画、広報、準備等主催者にとって大変な時間とエネルギーを要するが、参加学生から温かいメッセージをいただき、開催してよかったと思える2日間となった。



まあまあ知っている 10名<45%>、
あまり知らない 8名<36%>、
ほとんど知らない 4名<9%>

4 主催者としての総括

龍谷大学学生気候会議は3回開催され、大学の施策への貢献してきた。何よりも、1回目の気候会議の議論をうけて、大学は2022年1月に、創立400周年を迎える2039年度末までにカーボンニュートラルを実現することを宣言した。

第2回の気候会議については、議論のまとめを提言書という形で、学生代表者から学長へ手渡した。今回の提言書は、2022年に続き2回目となる。前回の提言書をうけて、大学はそのうちいくつかの事柄については対応し、具体策が実現、あるいは実現しつつある。例えば、外部機関との連携を強化すべきとの提言も1つのきっかけとなり、2022年4月に環境省と龍谷大学との間で、近畿エリアを始めとした地域脱炭素の実現に向け必要となる人材の育成を図るため、「地域脱炭素の推進に関する協力協定書」を締結し、これをもとに1名の環境省職員が大学に籍を置くこととなった。

さらに、2013年からすでに社会的責任投資として参画する全国初の地域貢献型メガソーラー発電所「龍谷ソーラーパーク」に取り組んできたほか、Daigasエナジーや関西電力といった外部関係者とも協力し、キャンパスでの電力の再生可能エネルギーへの転換に努めてきた。そして、2023年6月から3キャンパスすべての使用電力が100%再生可能エネルギーとなった。これは、西日本の大学では初、複数キャンパスを持つ私立大学では日本初である。

今回の提言書にある「伏見工業高校跡地のライフ・デザイン」に関する検討は、地域との連携をさらに強化することが大学の役割である、とのこれまでの学生気候会議での提言をうけて行われた。龍谷大学深草キャンパスの近隣に位置する伏見工業高校跡地の再開発プロジェクトについては、京都市や関連機関から情報提供をうけ、参加学生たちに具体的なアイデアを出してもらった。学生たちは自分たちの身近な地域の活性化の議論に参加できる良い機会をえ、「自分事」と感じつつ議論をかわし、大変良い経験になった。

他方、提言実現への取り組みが道半ばのものもある。今年度よりサステナビリティ推進室が設置された。これは、一步前進であり、今後この推進室がハブとなり、各関係部局を巻き込んで大学としてさらなる進展をはかる必要がある。

今後とも継続的に学生気候会議は開催されるであろうが、気候会議を通じて龍谷大学が脱炭

素社会実現にあたって、教職員と学生が互いに一層綿密に協力し、脱炭素化を理念から実行可能な行動へと結びつけていかなければならないと考える。龍谷大学が仏教SDGsを理念としておかげ、それを今後とも実現するのであれば、多くの課題についての大学のさまざまな意思決定のなかに、持続可能性の実現についての仕組みを揺るぎない形で整備すべきである。

まず第1に、大学の本務ともいべき教育において、各教学主体の展開するカリキュラムにおいても、脱炭素化への課題克服は、既存のさまざまな授業科目への単なる付け足しではなく、各学問領域における中心課題として位置づけられなければならない。その上で、学生にとって入学から卒業までの学びが、地球そのものの健康や健全性の確保なしに、我々一人ひとりの幸せもないことを理解した上で、どのような行動変容が可能かを考え実現していく道筋を描くことができる各種の能力を習得できる機会が提供される必要がある。さらには、そのような学びの機会が、学部・学科を横断し、多様な知識が融合し、総合的解決策へと展開していくようになることが望まれる。

学生の学びを支援するためにも、研究面での体制整備は不可欠である。脱炭素社会実現のために、分野（学部）横断型の研究プロジェクトを推進するしくみを構築する必要がある。その際、研究の成果を地域社会に還元し、地域との協働の過程に学生も含めた多様な関係者が参画する「社会実装型研究プロジェクト」を機能させることが重要である。

大学運営においても、サステナビリティ推進室が中心となり、脱炭素化の着実な実現がなされる必要がある。大学の建物のさらなるエネルギー効率の向上や、食の多様化やフードロスの削減をつうじた循環型社会実現への貢献、さらには、キャンパス間の移動に使われる交通手段や教職員や学生が利用する自動車やバイクの脱炭素化への支援、といった一連の諸政策が有機的に連携し、大きな効果を生めるよう実現に向かっていくことが望まれる。

さらには、そのような状況をしっかりとモニタリングと評価する仕組みの整備が必要不可欠である。それによってのみ、すでに宣言しているカーボンニュートラルへの進捗状況を把握し、関係者のさらなる行動変容を促せるようになるからである。

5 資料編

5.1 会議の内容

1日目のプログラム

- 9:15 開会、学長挨拶、来賓・講師紹介、ガイダンス
- 9:45 アイスブレイクを兼ねたカードゲーム進行：京都府地球温暖化防止活動推進センター副センター長 木原浩貴氏
- 12:05 基礎知識提供「気候変動とSDGs」
齋藤文彦 国際学部教授
- 13:30 京都市「脱炭素ライフスタイルの具体的な事例」
京都市環境政策局地球温暖化対策室
エネルギー政策部長 佐々木亮太氏
- 13:50 龍谷大学「ゼロカーボンユニバーシティに向けた取り組み」深尾昌峰 副学長
- 14:05 テーマ1「大学の脱炭素化へ向けた取り組み」
気候ネットワーク上席研究員 豊田陽介氏
- 15:05 テーマ1に関するグループワークと全体への議論結果の共有、講師・教員からのコメント、ファシリテーション・グラフィックを使った振り返り
- 16:45 閉会

冒頭、入澤崇学長から参加者へのメッセージが送られました。

学長から「様々な課題対応を教職員だけでやる時代ではない。学生目線で見つけ出した課題が大切。大学だけでなく地域をより良いものにし、世界に広げていく必要がある。気候会議で意見が交わって新しいアイデアが生まれる。学生の声は宝。これまで大学の取り組みに学生の目線は重視されてこなかったが、考え直さなければならない。この学生気候会議は学部時代に真剣に社会に向き合う場であり、この会議から学生主体の会議体が学内の様々なところで生まれることを期待している」と参加者への激励がなされました。

基礎知識提供「気候変動とSDGs」では国際学部の齋藤文彦教授からプラネタリーバウンダリー（地球の限界）について説明がなされました。齋藤教授は「私たちは物質的なレベルを下げなくても新たな豊かさを手に入れられるし、地球上のす

べての人々がその豊かさにはアクセスできるようにしなければならない」と締めくくりました。

午後の部は、講義の後グループワークに取り組みました。

京都市エネルギー政策部長の佐々木亮太氏から「脱炭素ライフスタイルの具体的な事例」が紹介されました。京都市は国から脱炭素先行地域に指定され、龍谷大学が立地する伏見エリアでは文化遺産群・商店街エリア等をターゲットにし、大学と協働してグリーン人材育成をめざしています。佐々木氏は「つながり、連携がキーワード。大学、企業とつながり相乗効果を創出させたい。皆さんには自分として何ができるか考えてほしい」と期待を示しました。

次に深尾昌峰副学長から、2039年までのカーボンニュートラル宣言に向けた戦略と具体的な取り組みについて情報提供がありました。深尾副学長は「現在大学全体の消費電力の4割を自家発電し、不足分は自然エネルギーを購入している。今後自家発電を増やし、サステナビリティを高め、次世代の取り組みをすすめる。次の価値を生み出していく。学生のみなさんもいっしょに考えて行動できることを期待している」とメッセージを送りました。

グループワークへの導入として、気候ネットワークの豊田氏から大学のCO2排出量データの紹介がありました。豊田氏は「2039年に大学全体で脱炭素化するのであれば、2030年にはどうなっているべきか、大学の直接排出量だけでなくサプライチェーンも含めて脱炭素をめざすのかも明確にしなければならない。気候変動はこの社会の様々な問題とつながっており、民間企業のビジネスモデルもサステナビリティを意識しなければ相手にされなくなってきている。みなさんの関心のある業界の仕事の内容がどうか変わっていくかも注目が必要」と問題提起しました。

以上の基礎知識、情報提供を受け、6つのグループに分かれて、大学に求めることについて議論が始まりました。ファシリテーターが進行し、熱心な議論が交わされました。

2日目のプログラム

- 9:30 1日目の振り返り、ガイダンス
 9:35 テーマ1の議論共有、教員からのコメント
 10:05 テーマ2「伏見工業高校跡地のライフ・デザイン」
 株式会社市浦ハウジング&プランニング
 大阪支店計画室長 森田恭平氏、木原氏
 11:15 「オーストリアの事例」木原氏
 11:30 テーマ2に関する議論ポイント解説、グループワークと全体での議論結果の共有、講師・教員からのコメント
 15:45 参加者の意見集約（ウェブ上）
 16:05 チェックアウト、修了証の交付式
 16:35 閉会、事後アンケート記入

前回の振り返りのあと、株式会社市浦ハウジング&プランニングの森田恭平氏から討論テーマIIに関する情報提供がなされました。京都市は、2024年3月末に学校再編で閉校する京都市立伏見工業高校の跡地4haに、脱炭素型の住宅街区の建設を計画しています。コンセプトを「エネルギーが街と人を育てていく」とし、地域に開かれた商業施設、菜園、コ・ワーキング施設、学生寮、社会人寮など多世代が住み替えながら共住でき、社会貢献にもつながる暮らしの実現をめざし、2028年には入居を開始できるようビジョンの具体化を進めています。森田氏は「ディベロッパ一、地域、企業、大学、団体などと一緒に作っていくプロジェクトであり、この会議で魅力的なアイデアが出されるのを楽しみにしている」と締めくくりました。

グループワークに入る前に、木原氏からオーストリアのランゲネック村の事例が紹介されました。木原氏は「20年前は過疎で未来が見えない村だったが、いまは人が増えている。それも脱炭素のためでも光熱費が安いからでもなく、ここに住みたいという人が増えている。日本人は気候変動対策をコストと受け取る人が多いが、これをひっくり返したい。そのためには脱炭素に暮らし方という息吹を吹き込んでいく必要がある。脱炭素型のライフスタイルを創出し、街区を地域に広げ、波及させていくため、大学としてどんな役割を果たせるか、考えよう」と視点の提供がなされました。

的場教授は、下記3つの論点を提示し、グループワークが始まりました。

- ①ハードだけでない脱炭素の取り組みをこの街区で進めるしくみ、取り組みとは？
- ②脱炭素化に向けてこの街区の住民間のつながりをどのように作り出すか
- ③この街区とその周辺の地域をどのように繋げていくか

2時間半のグループワークを経て、グループごとに成果が発表されました。

グループからは、「大学生が子供に勉強を教える場、高齢者対象のスマホ教室など、多世代が得意分野を生かしたコミュニケーションの場をつくる」「街区を知ってもらうためのお試し住宅をつくる」「ストリートバスケなどボール遊びができる場所がほしい」「学生がチューターとなり街の魅力をSNSで発信する」「不用品の交換所、カーシェア、菜園で育てた野菜を使ったコミュニティカフェ、駄菓子屋、足湯、サウナ、お寺、防音室、ドックランなど地域との交流を生む場所をつくる」「高齢者と若者が、電球の交換から買い物・ゴミ出し支援などでギブアンドテイクの関係づくり」など、ハード面だけでなくソフト面も含め多様なアイデアが出されました。

発表を受け、斎藤教授からは「伏見工業高校の跡地利用が、一人ひとりがどういきていきたいのかにつながっていく。義務感ではなく楽しいからやってみたいアイデアであることが大切。脱炭素のライフスタイルは我慢ではなく、人生を豊かにするものだ」とのコメントがなされました。

最後に、予め用意されていた大学が取り組むべき活動リストについて、重要度を投票する「意見集約」を行い、すべてのプログラムが終了しました。的場教授から一人ひとり修了証が手渡されたあと、参加者が輪になって座り、感想を述べ合い、会議は終了しました。

グループワークの様子



チェックアウトで参加全員で感想を述べあった



修了証の授与



最後に記念撮影！



5.2 運営体制

昨年度に引き続き、学生団体OC'sと龍谷大学LORCが共同で企画から実施まで担った。

会議当日はOC'sから6名のほか、実行委員を務める教員のゼミ生7名がファシリテーターとして参加し、グループディスカッションの円滑化、活発化に大きな役割を果たした。

また、学生ファシリテーターとしての姿勢・スキルを身につけるため、事前にファシリテーション研修を開催し、受講したメンバーのみ気候会議のファシリテーターを務めた。

ファシリテーション研修

日時：11月23日（日）9：30～17：00

場所：深草キャンパス22号館107教室

講師：

合同会社カーニバルライフ

副代表 山本 恵果さん

気候会議OG 松田あゆみさん

村田和代（政策学部教授）

受講学生数：13人

《ファシリテーション研修プログラム》

9:30 開会、チェックイン

9:40 話し合い1「外国人を案内するおすすめ京都観光プラン」

11:10 振り返り

12:40 ロールプレイ1

14:00 ロールプレイ2

15:15 ロールプレイ3

16:15 講義

16:30 講師から講評、チェックアウト

17:00 終了

《学生募集方法》

①全キャンパスでのポスター掲示

②ちらしの配布

1500枚印刷し、全教員の個人ポストへの投函、教員を通じた授業等での配布を行った。

③学内ポータルサイト掲示板への掲載

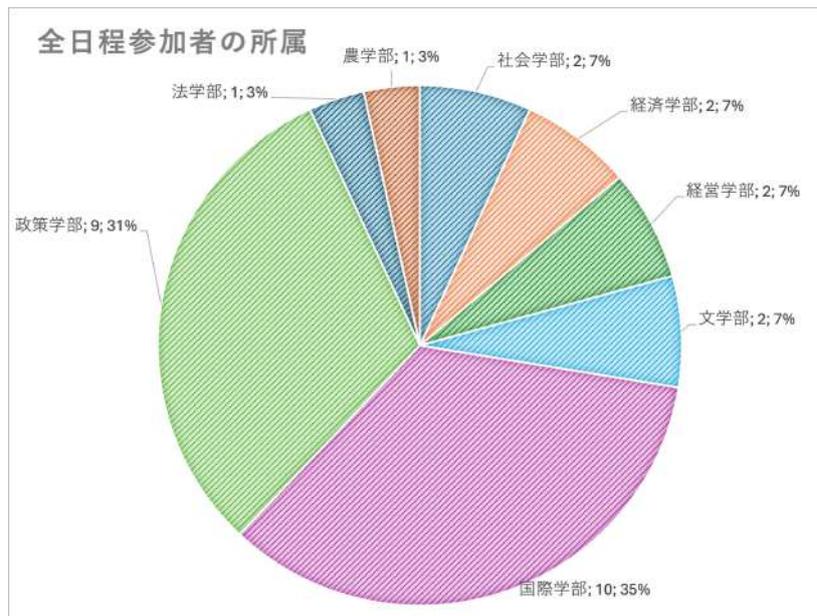
④メールでの募集案内送信

全学部学生19891人（入学年度2020～2023年度）の2割にあたる3995人を無作為抽出し、学籍番号をもとに作成したメールアドレスへ一斉配信を行った。

気候会議参加学生の内訳

参加学生数：31人（1日目）、30人（2日目）

うち全日程参加学生29人



5.3 ファシリテーション・グラフィック成果物

グループディスカッションの発表を、特定非営利活動法人グローバル人材開発センターの外崎佑実氏にお願いした。

成果物は下記QRコードから参照可能。

2023.12.02(土) 実現のものになりますように! 2023/202

龍谷大学

第3回 学生気候会議2023

詳しいだけでなく興味がある人だけの多様性

司会  村田和代先生

開会挨拶 by 入澤学長 

世界各地で「気候会議」
龍谷でできることが嬉しい!

一人ひとり「自分が何処に行くか」
地域、京都、世界へ広げて行けたら

「村水洗」のニュース
氷河湖の崩壊
報じられている情報が正確...

一人ひとりの営(ま)み

「人間存在」人間起点に世界を視る

京阪駅隣接地域に
人と育つ施設
志のある学生

学生の声は宝

連携
学生主体の志とともに活動する
学内に、この機会が広がってほしい...☆

企業&金融&大学

くらしとまなび



5.4 学生気候会議意見集約項目（全文）

※各項目の選択肢は全て、「とくに重視すべき」、「できれば重視すべき」、「あまり重視する必要はない」、「まったく重視する必要はない」の4択とした。

1 龍谷大学内の取り組み

1-1 建物の性能

新校舎の建設や既存の建物の建替時には最新の省エネルギー技術を採用し、キャンパス内の建築物の省エネルギー化を推進する

1-2 再生可能エネルギーの活用

温暖化ガスの排出を出来るだけ削減するために、再生可能エネルギー由来の電力を使用する

1-3 原発エネルギーの活用

温暖化ガスの排出を出来るだけ削減するために、原子力発電由来の電力を使用する（外部から購入する）

1-4 エネルギーの調達

エネルギー源の脱炭素化に向けて、校舎屋上への太陽光パネルの設置や、学外での太陽光や風力など再エネ発電施設の整備を進める

1-5 ゴミの分別・リサイクルの促進

温暖化ガスの排出の削減を目指して、キャンパス内のゴミの分別・リサイクルを促進する

1-6 食品ロスへの対策

大量生産・大量消費社会からの脱却に向け、キャンパス内の食堂における食品ロスの低減対策を進める

1-7 地産地消の促進

フードマイレージを減らすために、キャンパス内食堂と協力して地産地消を意識した食材調達を進める

1-8 学生の能動的な役割

大学の脱炭素化に向けた対策の推進のために、大学の気候ガバナンス（脱炭素化対策に関する意思決定）への学生の参画機会を拡充する

1-9 全国の大学に先駆けた脱炭素化の取り組み

カーボン・ニュートラルの先進大学となるべく、最新技術を用いた施設・設備への積極的な投資を行う

2 人材育成と人材像

2-1 脱炭素に関する科目、カリキュラム強化

全ての学部や大学院教育において、脱炭素化を学ぶことができる科目やカリキュラムを増強する

2-2 【自由記述】

脱炭素社会への挑戦において、あなたはどのような人材になりたいですか

3 世界・地域のなかの龍谷大学としての役割

3-1 気候変動に関する地域住民向け講座の開催

地域住民や企業の方々の意識や実践を促すために、気候変動や脱炭素化を学ぶことができる講座を開催する

3-2 講義（ゼミ）や課外活動による学生の地域活動の促進

地域の脱炭素化をサポートする学生・大学院生による社会貢献活動の企画・実践の促進とサポートの提供

3-3 再開発事業への参加

伏見工業高校跡地の再開発事業に参加し、他の関係者とも協力しながら取り組みを実施

3-4-1 再開発事業の他地域への波及

伏見工業高校跡地の再開発事業に参加することにより、伏見を起点に京都や日本、さらには世界を持続可能に変革

3-4-2 再開発事業への参加方法

あなたならどのような形で伏見工業高校跡地の再開発事業に参加してみたいでしょうか？

3-4-3 他地域でのプロジェクトサポート

伏見工業高校跡地のプロジェクト以外にも、機会があれば龍谷大学として地域に根ざした脱炭素化プロジェクトをサポート

3-5 国や自治体との政策連携の強化

国の脱炭素戦略や自治体の政策・事業の実践を進めるための協力関係の強化

3-6 京都の脱炭素化を進めるための、近隣大学との研究・教育連携の強化

龍谷大学や伏見・深草地区のカーボン・ニュートラルへの挑戦について、あなたが思うことを自由に記載して下さい。